

ポジティブ感情と危険認知との関係 —保育場面における楽観バイアスに着目して—

○伊藤 優 (島根大学)

鎌田雅史 (就実短期大学)

キーワード：保育場面，危険認知，ポジティブ感情

保育園や幼稚園での子どもの安全を保証することは最重要事項である。しかし時として経験豊かな保育者でも信じられないようなヒューマンエラーを犯す(関川, 2014)。「事故はおこるもの」としても、どのような条件下でその確率が高まるのか検証する必要があると認められる。本研究は、感情価を伴うエピソード想起および、深刻事故への楽観的態度である楽観バイアス(掛札, 2012)が、危険認知に影響する可能性について探索的に検討する。

方 法

本調査には、LimeSurvey(GmbH が公開しているオープンソースシステム)を活用した。2018 年 12 月から 2019 年 1 月にかけ、短期大学・大学・専門学校に在籍する学生 1750 名に調査票を配布し、636 名(回収率 36.3%)から回答を得た。

協力者はランダムかつ等確率で、Positive 群、Neutral 群、Negative 群のいずれかに分類された。Positive 群では嬉しかった出来事、Negative 群では現在の課題について一問一答式の質問を 3 問表示し、Neutral 群では、この設問を省略した。

次いで、保育者が子どもを園外に引率するイラストのシーンが提示され、どのくらいの危険が潜んでいると思うかについて【0 点：全く危険が無く安全な状態 ～ 100 点：命に関わる事故が起こる可能性がある極めて危険な状態】として直感的に答えるように求めた。協力者は 2 場面(A 場面、B 場面)について危険度評定を行った。

最後に、掛札(2012)や Caponecchia(2010)を参考に作成した楽観バイアスに関する質問 6 項目(例：私は、多少危険なことをしても大丈夫だと思う)について、5 件法リッカート尺度【0 全くあてはまらない、4 かなりあてはまる】による回答を求めた。

結果と考察

想起群ごとの危険度得点比較

混合計画の 2 要因共分散分析(被験者内変数：イラスト 2 場面、被験者内要因：想起エピソード 3 群)を行った。群間の協力者属性による効果を統制する目的で、性別、学年、幼保の免許状の取得を目指しているか否か、安全に関する専門的授業を受けた経験を有しているか、日常で就学前の子供と接する機会がどの程度あるかについて共変量としてモデルに組み込んだ。

想起群の主効果は有意であり($F(2, 495)=5.08$, $p=.007$, 偏 $\eta^2=.02$)、Holm 法による多重比較において Positive 群と Negative 群間に有意差が認められた($t(495)=3.18$, $p=.005$)。ポジティブエピソードの想起はネガティブエピソードの想起よりも危険察知の感受性を低める可能性が示された。

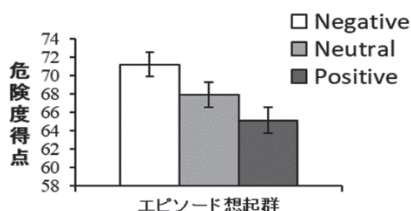
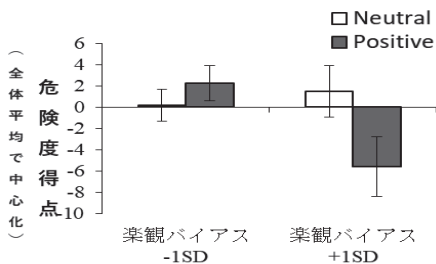


Figure 1 エピソード想起ごとの危険度得点

楽観バイアスとエピソード想起の関連

重回帰分析により、想起群と楽観バイアスとの関連を検討した。段階投入法による分析の結果、楽観バイアスと想起群との交互作用項が有意であり($\beta=-5.96$, $p=.025$, $CI [-11.28, -0.67]$)、主効果のみのモデルに比べ危険度得点に対するモデルの予測力を有意に増加した ($\Delta R^2=.01$ ($F(2, 484) = 329.76$, $p<.001$)). 単純傾斜検定の結果、Neutral 群では楽観バイアスの β は有意でなく($\beta=0.88$, $p=.48$)、Positive 群においては楽観バイアスの β は有意な負の値を示した($\beta=-5.08$, $p=.03$)。楽観バイアスが強い人はポジティブ想起によって危険を過小評価する可能性が示された。

Figure 2 危険度得点に関する
楽観バイアスと想起エピソードの交互作用

付 記

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 18K13140.